



ユニードパック株式会社

ユニードパック株式会社

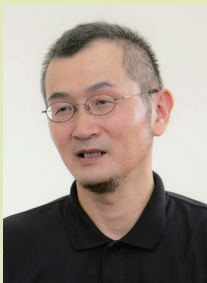
- 本社所在地
香川県仲多度郡まんのう町炭所西800番地
- 主な事業内容
グラビア印刷、包装資材の製造・販売



- 設立
1992年4月
- URL
<http://www.yunido.com/>
- 導入ソリューション
Automation Engine、ArtPro、FlexProof/E



ユニードパック株式会社
代表取締役社長
オンデマンドGrリーダー
永森 孝一氏



ユニードパック株式会社
デジタル課 兼
オンデマンドGr
高野 明人氏

オンデマンド印刷にAutomation Engine導入 作業時間を1/5に、納期を2/3に短縮

包装資材の製造・販売を手がけるユニードパックが、「Automation Engine」を導入してオンデマンド印刷の業務効率化に大きな成果を上げている。これまで手作業で行っていた煩雑なプロセスをAutomation Engineのワークフロー機能で自動化した結果、作業時間全体を従来の5分の1に削減できた。

【導入の背景】

ネットで注目されている「うmy棒」のオンデマンド印刷が大きな負担に

香川県を拠点とするユニードパックは、およそ四半世紀にわたって、食品や文具、紙製品、ダイレクトマーケティング、農作物といった多様な産業向けに軟包装資材を製造してきた。創業当初からグラビア印刷を手掛けてきたが、「小ロット・短納期に対する市場ニーズに応えることが競争優位性の源泉になると判断した」（代表取締役社長の永森孝一氏）ために、デジタル印刷機を2008年に導入。デジタル印刷のビジネスにも参入した。

同社が、デジタル印刷の機動力を生かして取り組み始めたのが「うmy棒」のパッケージ印刷である。うmy棒とは、子どもから大人までに人気の菓子「うまい棒」を、消費者がデザインしたパッケージで梱包した商品。消費者がウェブサイト上で顔写真などの画像データをアップロードして簡易的にデザインすると、そのデザインのオリジナルパッケージで梱包されたうまい棒が郵送されてくる仕組みだ。

うmy棒は現在、SNSなどで結婚式の記念品や誕生日プレゼントとして話題を集めており、隠れたヒット商品となっている。何社かの企業が「うmy棒」のブランドで同様のサービスを展開しているが、同社はウェブサイト「うmy棒本舗」を運営するActix（東京・墨田区）と協業。うmy棒本舗では、消費者がデザインしたオリジナルパッケージの商品を50本セットで3015円で販売。ここで注文を受けた商品のパッケージをユニードパックが印刷している。

パッケージが完成するまでの具体的な手順は次の通りだ。まずは、インターネットを通して消費者の画像データをダウンロードする。次に、このデータをラスタライズしてPDFファイルとして保存。これをパッケージの雛型の中に埋め込んで面付けし、印刷データ（PDF）を完成させる。10個のパッケージを完成させるのに、およそ2時間を要する。



同社にとって、この作業が大きな負担となっていた。注文件数は週に50～100件。結婚式での引き合いが多く、特に春先に注文が多くなる。

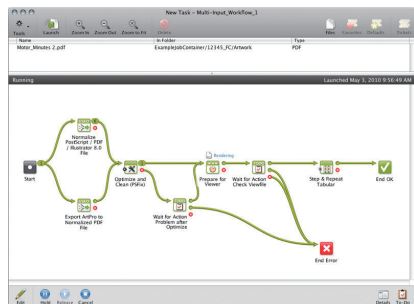
この作業には2人の社員が携わっている。40～50件ほど注文がたまった段階で作業を実施しているが、週に3桁近くの注文がある場合には、業務がパンク寸前になっていたという。2人の社員がフル回転して作業を実施しても、納期が遅れてしまう恐れがあったのだ。単価が低いビジネスだけに、さらなる人員の投入は困難だった。

【導入のポイント】 Automation Engineを導入して オンデマンド印刷の作業を自動化

そこで同社は、この作業の効率化を検討。デジタル課兼オンデマンドGrの高野明人氏は、「それぞれの作業は複雑だが、定型的なものなので自動化できると考え、ITの導入を決断した」と振り返る。

ただし、すぐにIT化に至ったわけではない。本当に実現できるか否かを約1年かけて検討した。最終的には、2012年4月にエスコグラフィックスが提供するプリプレス自動化ソリューション「Automation Engine」を導入した。

ユニードパックでは、エスコグラフィックスのプリプレスエディタ「ArtPro」を、ここ15年ほど利用していた。そのため、うmy棒のオンデマンド印刷をIT化するにあたって、エスコグラフィックスに相談したところ、Automation Engineの提案を受けた。そこで両社が協力して、実際にAutomation Engineを稼働させて検証を進めたところ、作業の多くを自動化できることが明らかになり、本格導入に至った。



Automation Engineは、既存のシステムとの連携が可能なワークフロー管理機

能を備える。ArtProをはじめとするプリプレス関連ソフトやデジタル印刷機と自動的に連携。ユニードパックでは、うmy棒のパッケージの編集作業において、印刷サイズに応じて印刷データを自動的にレイアウトする、あるいは後工程に必要なアクセサリを自動的に配置するといった処理を自動化している。

さらに、SQLクエリやXML、XMPデータを通じて、注文管理や会計を担うERPなどの外部システムとの連携も可能。このため、デザインなどの知的作業以外の定型業務を手作業からITによる自動化へ移行することが可能だ。

ワークフローの定義は、グラフィカルなユーザー・インターフェース上で編集する。マウスを使って、画面上で工場の生産ラインを定義していくようなイメージである。作業の繰り返しや分岐を設定しておく、システムが自動的に判断するので、ヒューマンエラーを排除できる。

【導入効果】 作業時間が5分の1に短縮 ほかの業務へも横展開

同社は、画像データのダウンロードからデジタル印刷機での出力までのワークフローをAutomation Engineに登録し、作業を自動化している。「ボタンを押すと、知的な作業が必要な段階まで自動的に仕事が進んでいくイメージ」（高野氏）だと言う。

この結果、作業の効率は大きく向上。印刷データを完成させるまでの作業時間が従来の5分の1にまで短縮した。つまり、うmy棒に関するオンデマンド印刷の業務全体が、従来に比べて5倍のスピードで進むようになったのである。印刷したパッケージを納入するまでのリードタイムも短縮できた。従来は3日だったリードタイムが、現在は2日となっている。



同社は、Automation Engineの導入効

果を高く評価して、ほかの業務へ横展開している。それが、ポリバッグのオンデマンド印刷である。ポリバッグのオンデマンド印刷は、うmy棒以上に繁忙期と閑散期の格差が激しい。毎年8月と12月に開催される同人誌即売会「コミックマーケット」の直前に注文が集中する。ポリバッグの印刷作業は、うmy棒と似ているので、Automation Engineのバージョンアップの際にシステムを拡張。ポリバックのオンデマンド印刷もAutomation Engineのワークフローで管理するようになった。



さらに、ワークフローを適用する業務を広げることも検討している。同社は現在、インクジェットの印刷物の色校正にエスコグラフィックスのソフトウェアRIP（ラスター・イメージ・プロセッサ）「FlexProof/E」を活用中。現在、この作業はAutomation Engineのワークフローには含まれていないが、近い将来にワークフローに登録して、さらなる業務の効率化を進める計画である。

代表取締役社長の永森氏は、Automation Engineを活用した改革が、競争優位性の源泉につながると考えている。技術の進化によってハードウェアが高機能・高性能化した現在、印刷業界ではアウトプットである印刷物では他社との差別化が難しいのが実情だ。

「アウトプットを出す前のフロント部分のプロセスで、いかに新たな価値を創出していくかが重要な課題」。代表取締役社長の永森氏は、こう指摘する。そのような意味では、フロント部分のプロセスの効率を大きく向上させるAutomation Engineが、同社にとって競争力を向上させる武器の一つになっているようだ。